「ファリンドン通りのアリストパネス」

――ウィリアム・モリスの社会主義演劇『テーブルは覆る、ナプキンズは目覚める』覚書――

川　端　康　雄

はじめに

ウィリアム・モリス（William Morris, 1834–96）の文芸上の創作のなかで、「演劇的」（dramatic）と呼べる作品はいくつかある。第一詩集『ギネヴィアの抗弁、その他の詩』（*The Defence of Guenevere and Other Poems*, 1858）所収の何篇かの詩がそうであり、たとえば「サー・ガラハッド――クリスマスの聖史劇」（Sir Galahad: A Christmas Mystery）は中世の聖史劇（mystery play）の様式を用いてアーサー王物語中の聖杯伝説を詩劇に仕立てている。また標題作でのギネヴィアの語りは典型的な「劇的独白」（dramatic monologue）の手法を採っている。中期の『恋だにあらば』（*Love is Enough*, 1872）は、副題に「ひとつの道徳劇」（A Morality）とあるように、英国中世の寓意的道徳劇の形式を用いたうえで重層的な劇構造にしている。これらはいずれも読まれるものとして書かれた韻文作品であるのだが、モリス作品のなかでじっさいに上演するために書かれた戯曲がひとつだけある。『テーブルは覆る、ナプキンズは目覚める――社会主義のインタールード』（*The Tables Turned; or, Nupkins Awakened — A Socialist Interlude*, 1887）がそれである。

これはモリスが社会主義運動に精力的に関わっていた時期に、かれが当時所属していた社会主義同盟（the Socialist League）の機関紙『コモンウィール』（*The Commonweal*）の資金集めのために同盟員たちみずからが出演して上演された劇である。初演は 1887 年 10 月 15 日、上演場所はロンドン、

Studies in English and American Literature, No. 55, March 2020
©2020 by the Engish Literary Society of Japan Women's University

ファリンドン通りにある社会主義同盟の事務所の裏にある倉庫だった。初演の模様を伝えるロンドンの夕刊紙『ペル・メル・ガゼット』(*Pall Mall Gazette*) によれば、観客は「二、三百人」いて超満員だった (“Aristophanes” 1)。観劇した G. B. ショー (George Bernard Shaw, 1856–1950) は、「これほど圧倒的な大成功を収めた初日の舞台を見たのは初めてだった」(*Our Theatres* 213) と述べている。この初演のあと、1887 年 10 月から 1888 年 6 月までのあいだに場所を変えて少なくとも 11 回上演されたと推定される (Wiens, “Introduction” 19)。中世道徳劇の「インタールード」の形式を借りての社会主義的な「アジプロ」劇という趣をもつこの作品では、モリスは役者兼台本作者としてのみならず、実質上、プロデューサーとして制作にもあたった。多方面にわたるモリスの仕事の例にもれず、いったん関わるとけっして生半可には事にあたらず、類まれな集中力と熱意を込めて上演にこぎつけたのである。

この戯曲が最初に活字になったのは社会主義同盟の機関紙『コモンウィール』(*The Commonweal*) のオフィス刊の冊子としてであり、メイ・モリス編のモリス著作集 24 巻には収録されず、著作集の補遺としておなじくメイ・モリスの編で 1936 年刊行の *William Morris, Artist, Writer, Socialist* に復刻された (II, 528–67)。1994 年に Pamela Bracken Wiens が序文と注を付してこの戯曲を単独で刊行している。加えていまでは (モリスの他の著作のほとんどと同様に) ウェッブ上でテクストを得ることができるようになってはいる。だが上記の事情でモリスの著作のなかであまり注目されてこなかった作品であった。

本稿ではこの劇 (以下、『テーブルは覆る』と略記する) を取り上げ、モリスが当時精力を傾けていた社会主義運動との関連、また 3 年後に『コモンウィール』に連載する『ユートピアだより』(*News from Nowhere*, 1890) で描きだすユートピア的ヴィジョンが部分的に先取りされている点に注目し、この作品の意義を検討したい。

I. あらすじ

『テーブルは覆る』は最後の劇中歌をのぞいて散文で台詞が書かれている。分量はおよそ1万3千語あるので、上演時間は（休憩を数えなければ）2時間程度であったろう。以下にあらすじを記す。

劇は二部構成になっており、第一部は法廷の場面。主人公である裁判官ナプキンズ氏（Mr. Justice Nupkins）が入廷し、連続して三つの裁判がおこなわれる。最初の被告人ラーディダー氏（Mr. La-di-da; 意訳すると「キザ男氏」）で、詐欺罪で告発されたが、「紳士」（つまり上層階級の人間）であるために裁判官の心証がよく、禁固一カ月という軽微な判決を受ける。二番目の裁判の被告はメアリー・ピンチ（Mary Pinch）という名の労働者階級の女性（田舎で暮らしていたが生活が困難となりロンドンに移り住んでいた）で、パン三斤を店から盗んだとする無実の罪を着せられている（名前の Pinch には「困難」と「盗み」の両方の意味がふくまれている）。複数の目撃証言に矛盾があるにもかかわらず、ナプキンズは「これは通常の窃盗」ではなく「革命的な窃盗」であるという理由でメアリーに「十八カ月の重労働の刑」を宣告する。つぎに最後の被告のジャック・フリーマン（Jack Freeman）が登場。かれは街頭で社会主義の宣伝活動をしていたときに道路妨害罪と暴動煽動罪の廉で警官に捕縛された。この被告が富裕層の大量殺人を企んでいたと信じ込んだナプキンズは、その反証となる目撃証言がなされたのにもかかわらず、「六年の重懲役と百ポンドの罰金」の刑を宣告する。だが法廷外から先程来聞こえていた「ラ・マルセイエーズ」の歌声がしだいに高まり、革命旗を掲げた旗手が登場、非暴力の社会主義革命が完遂しつつあることを告げる。この裁判所は廃止し、今後はすべての人びとに食糧を無料で提供する市場にすると旗手は宣言する。

第二部は革命後の英国の田舎が舞台となる。ナプキンズは、社会主義者たちに縛り首にされることを怖れて木陰に隠れている。そこにメアリー・ピンチが登場、田舎暮らしを再開できて心身とも満たされている。メアリーはナプキンズを見つけ、家に招くが、ナプキンズはそれが自分を捕縛する

罠ではないかと疑い、戦々恐々としている。この新世界ではもはや裁判官も牢獄も用済みとなっており、意志決定や問題の処理は戸外での民会によってなされている。ナプキンズについては、そのような話し合いの末に、罪滅ぼしとして「ジャガイモ掘り」の仕事を課すことが決められる。一同、フランス革命時に流行していた「カルマニョール」の節に合わせて自由の歌を歌い踊って大団円となる。

II.　標題の含意

The Tables Turned; or, Nupkins Awakened――このタイトルを初めて目にする人は風変わりな標題であるという印象を持たれることであろう。これについて多少説明を加えておきたい。

前の部分、“The Tables Turned” は “to turn the tables” という英語慣用句をふまえている。『オクスフォード英語辞典』では、「とくに不利な立場を有利な立場に変えることによって、他者との関係での立場を逆転させること。形勢を完全に逆転させること」と定義されていて、補足として「ボードゲームにおける盤の位置を逆にすること、そうすることでゲームのそれぞれのプレイヤーの状況を逆にしてしまうことに関係する。〔この慣用句の初出は〕1612 年」[1] とある。便宜上「テーブルは覆る」と訳したが、本来的には卓の上下をひっくり返すのではなく、チェス盤などのボードを水平に 180 度逆にするイメージに由来するので (「攻守所を変える」という日本語表現に近いか)、この「覆る」という訳語では原文と若干のずれがあることを断っておかなければならない。

さらに “The Tables Turned” というフレーズはウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770–50) の同名の詩を連想させる。これはコールリッジ (S. T. Coleridge, 1772–1834) との共著『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads*, 1798) に収録されている。「さあ、立ちたまえ、わが友よ、本を片付けてしまえ／なんでそんなに〔読書で〕あくせくしているのだ。／さあ、立ちたまえ、わが友よ、本から離れるのだ／さもないときっと腰が曲がって

しまうぞ」[2] という連で始まるこの詩は、書物をとおして得る知識・教養よりも自然を直接経験することのほうが大切であること、いわば「書を捨てて自然に向かおう」というアピールであり、そうした生き方の「転換」がタイトルに込められている。ではこの詩がモリスの戯曲といかなる関わりをもつか。第二部の場面が大都会ロンドンでなく革命後の牧歌的な田舎に設定されている点では、ワーズワスの座学から自然の直接体験への「逆転」と一定の共通性がある。もっとも、モリスはロマン派の詩人たちのなかで例外的にワーズワスに批判的であった。ワーズワスの後半生に目立つ福音主義的・反動的な傾向に反感を抱いていたように思われる[3]。それを考え合わせると、社会主義的メッセージが濃厚なこの戯曲のなかでモリスはワーズワスの詩の題名を一種のパロディとして用いて、社会主義的メッセージをより強めたと解釈することも可能である。

じっさい、第一部、第二部とも、幕切れにはこのフレーズが社会主義革命の成就を強調する決め台詞として用いられている。第一部の最後、革命を告げる旗手が赤旗を掲げて法廷に躍り込むと、裁判官ナプキンズはパニックを起こし、「人殺し！ 泥棒！ 火事だ！」と叫ぶ。それに対して旗手はこう述べる。

> ほら、ほら、そんなに騒ぎ立てなさるな。そんなに喚きたいなら、外に出て行って、野っ原で角を生やした牛たちといっしょにモーモー鳴いてりゃいい。いまは牛たちには裁判所が要るのかもしれないしね。だけどわれわれにはもう要らない。そして良き仲間たちよ、〈社会革命〉に万歳だ。かくして〈テーブルが覆った〉のだ。そして、さあ――仕事だ――仕事にかかろう。
>
> ［裁判官、悲鳴を上げて失神。幕が下りる。］(22)[4]

そして第二部の最後のジャック・フリーマンと（裁判官改め）「市民ナプキンズ」（Citizen Nupkins）とのやりとりはこうなっている。

> **ジャック**　さて、ナプキンズ、いいかい、結局あなたはわれわれ呪わ

れし〈社会主義者たち〉の上を行ったのだ。なにしろあなたは以前はわれわれを虐待し、牢屋に送って絞首刑に処したもので、われわれはそれに耐えなければならなかった。だがいまはあなたも、あなたの手下も、もはや主人ではない。主人なんかもうひとりもいない。だからあなたを虐待する者もいないというわけだ。どんな気分だい？（と、かれの肩をぽんと叩く。）

市民ナプキンズ　（突然泣き出して）法律家のいない世界なんて！　ああ、なんたることか！　わしがジャガイモ掘りをしてみなが幸せになるのを見る、そんな羽目になろうとは！

ジャック　そう、ナプキンズよ、あなたは辛抱しなければならない。そしてわたしはといえば、あなたの落胆ぶりを見てもたいして残念じゃないんだ。悪党どもが悪事を働く機会を奪われて、もはや悪党になれぬと嘆くとき、そのときたしかに〈テーブルは覆った〉のだ。（31–32）

悪徳裁判官ナプキンズの名前の由来についても述べておく。これがディケンズ（Charles Dickens, 1812–70）の小説『ピクウィック・ペイパーズ』（*The Pickwick Papers* 1836–37）のなかに登場するイプスウィッチの市長にして主席治安判事ジョージ・ナプキンズ氏（Mr. George Nupkins）の名前を借りているのは明らかである。小説の第 24 章で主人公のピクウィックは召使いのサム・ウィーラー、仲間のタップマンとともに、市の治安を乱した容疑で身柄を拘束される。短気で思慮の浅いナプキンズ夫人のせいでもあるが、このナプキンズも正確な判断ができない人物として戯画化されている。ただし『テーブルは覆る』の裁判官とちがって『ピウィック』のナプキンズ判事は公共心が高く、判断力に不安があっても最終的には公平な裁きをする。

してみると、ワーズワスの詩の題を連想させる “The Tables Turned” と、ディケンズの登場人物名を用いた “Nupkins Awakened” と、ふたつの異質な文学的引喩を組み合わせたことによって、このタイトルじたいが独特な滑稽味を醸し出していると言うことができるだろう。

III. 社会主義者たちの法廷闘争——1880 年代イギリスの歴史的文脈

ディケンズ由来の人物名にちなむため、『テーブルは覆る』のナプキンズは不公平な悪徳裁判官とはいえ、間の抜けたところもあって徹頭徹尾憎むべき人物とまではいえない。ところがモリスがそのモデルとしたであろう現実の裁判官たちはそうではなかったようだ。バーナード・ショーはナプキンズのモデルを判事のサー・ピーター・エドリン（Sir Peter Edlin, 1819–1903）としている。この判事は社会主義者たちのあいだでは「道路妨害罪」で重い刑罰を科すことで悪名が高かった。その「道路妨害罪」というのも、「公道で演説者や聴衆が立ち止まっていて、そこを人や乗り物が通り抜けたいのに邪魔になって通れないという場合に、道路妨害罪を犯したと警官に証言させることでつねに証明可能」（Shaw, *Our Theatres* 212）なのだった。

1880 年代半ばあたりから警察当局が社会主義者への警戒を強め、取り締まりのためのもっとも簡単な方便として道路妨害罪で街頭集会を解散させることが頻発した。不当逮捕がつづくなか、社会民主連盟（The Social Democratic Federation; SDF）と社会主義同盟が言論の自由を求める運動で共闘した。1885 年 9 月 20 日、ロンドン、ホワイトチャペル区での千人規模の集会では、演説者ら 8 名が道路妨害罪と公務執行妨害罪で逮捕された。翌日にテムズ警察裁判所でおこなわれた公判をモリスは傍聴した。仕立屋を営むルイス・ライアンズ（Lewis Lyons）に懲役 2 ヶ月、その他にはそれぞれ 40 シリング（2 ポンド）の罰金もしくは禁固 1 カ月の刑が宣告されると、モリスは「恥を知れ」と叫び、回り中から怒号があがり法廷内は混乱状態になった。警官隊が法廷から傍聴者を追い出しにかかり、モリスも警官に小突きまわされた。「暴行罪で訴えるぞ」と言うとモリスは即座に身柄を拘束され、二時間後に判事ソンダーズの前に引き出された。翌日の『デイリー・ニューズ』で報道されたその際のやりとりは『テーブルは覆る』を彷彿とさせる。最後のあたりを引いておこう。

モリス氏——わたしは振り向いて警官に抗議しましたが、決して手を

振り上げなかったと、はっきり断言いたします。かれは甚だ乱暴な振る舞いをしたので、わたしは是が非でも暴行罪で告発する所存であります。
ソンダーズ氏――被告のご職業は？
モリス氏――わたしは、思うに、ヨーロッパ中でかなり名の知れた芸術家にして文学者であります。
ソンダーズ氏――それをするおつもりはなかったのですね？
被告人〔モリス〕――まったく殴ってなどいません。
ソンダーズ氏――では、釈放いたす。
被告人――だが本当に何もしていないんだ。
ソンダーズ氏――そう、お望みならいてもよろしい。
被告人――いたくなんかあるものか。（Qtd. in Henderson 282）

同記事は「モリスが釈放されて通りに出ると、集まっていた群衆は歓呼の嵐でかれを迎えた」と結んでいる（qtd. in Henderson 283）。

明らかに警察当局も裁判官もモリスの存在に当惑していた。上記の訴訟にしても、被告が労働者階級であれば無罪放免にはせず、重い刑を課していただろう。それを知った上でモリスは、同志が逮捕されたときには警察や裁判所に出頭することを心がけた。モリス自身も、1886年7月に道路妨害罪の廉で法廷への出頭を命せられた。メリルボン区のベル街での集会で、「中流・上流階級の連中が贅沢をして遊び呆けていられるのは、労働者たちを食い物にしているからです。労働者たちは貧困にあえぎ、苦しめられています。こうした状況を変える方法はひとつしかありません。社会の転覆をはかることです」（qtd. in Henderson 289–90）と断じ、革命への準備を呼びかけたところで、警察の中止命令が出て告発されたのだった。翌日、出廷したモリスに対して判事は、「被告は紳士であるがゆえ、指摘を受ければそうした集会が道路妨害罪であることを理解し、以後参加を控えるであろう」（qtd. in Henderson 290）からと情状酌量し、わずか1シリングの罰金刑を言い渡した。ところがその前の週におなじく道路妨害罪で逮捕されたサム・マナリング（Sam Mainwaring, 1841–1907）とジャック・ウィリア

ムズ（Jack Williams, c. 1854–1917）という労働者階級のふたりの同志は、「紳士」ではないがゆえに、それぞれ 20 ポンドの罰金刑を科された。それはモリスの科された 1 シリングの 400 倍で、マナリングらの労働賃金の 2 カ月分ぐらいになるだろう。ふたりは罰金の支払いを拒否し、2 カ月の懲役刑に服すこととなった。

翌 1887 年もモリスらにとって状況は悪化の一途をたどる。87 年 1 月に社会主義同盟の同志二人――チャールズ・モーブリー（Charles Mowbray, 1856–1910）とフレッデリック・ヘンダーソン（Frederick Henderson, 1868–1957）がノリッジでの失業者の集会で演説した際に、暴動を扇動したとして逮捕された。二人の裁判で判事グランサム（Judge Grantham）は、ノリッジ市での貧民のための施設がすばらしいこと、とくに救貧院の環境が恵まれていると自画自賛したうえで、ヘンダーソンに禁固 4 ヶ月、そして子ども 5 人の父親であるモーブリーに禁固 9 ヶ月を宣告した。この話を聞いてモリスは激怒し、『デイリー・ニューズ』紙に「ノリッジでの騒動」と題する投書をし、さらに『コモンウィール』紙の 1887 年 1 月 29 日号の「時事短信」（Notes on Passing Events）に批判記事を書いている。そこでモリスは判事グランサムを（嘲笑を意図して）ナプキンズに喩えている（Morris, *Journalism* 185）。

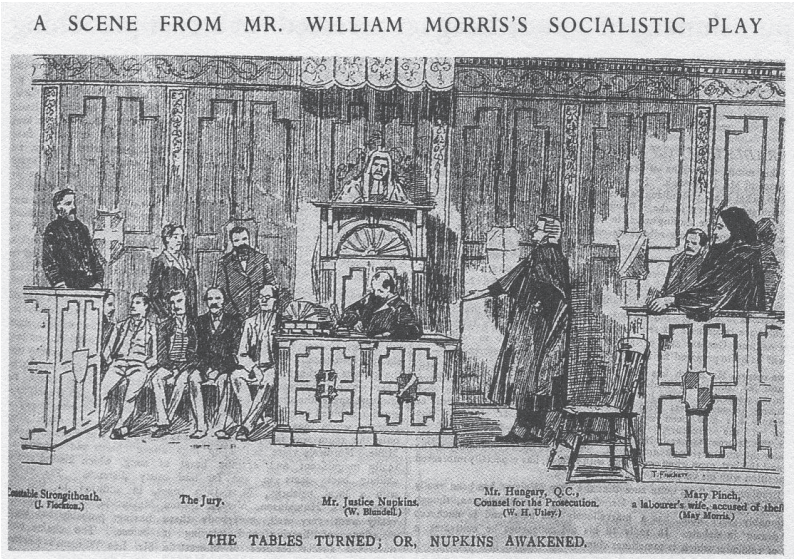
1887 年 2 月にはロンドンで社会主義同盟ハックニー支部のメンバーであるジェイムズ・オールマン（James Allman, 1864/5-?）が街頭で演説し告訴された。裁判でかれは「警察は社会主義者のみを狙い撃ちにしていて、他は捕らえない。数人の労働者が集まり、自分たちがいかに収奪されているかを仲間たちに指摘するときにかぎってこの古い法律を行使する」（qtd. in Salmon14）と警察を非難した。これに対して判事のハネイは、すでにふたつの同罪の前科があるということでオールマンに 40 シリング（2 ポンド）の罰金、さもなくば 1 カ月の禁固刑を科した。罰金を支払う余裕がなく、同盟からの寄付の申し出も謝辞して、かれは禁固刑を受けた。刑期を終えたオールマンを称えるために、3 月 28 日にハイドパークでデモがおこなわ

れた（Boos 79）。法廷で毅然とした態度で法の不平等を批判したオールマンにモリスは感心したようで、ニコラス・サーモンが指摘するように、この労働者が『テーブルは覆る』のジャック・フリーマン（自由人ジャック）のモデルであった可能性が高い。名前もたしかに似せている（Salmon 14）。

『テーブルは覆る』の第一部の法廷場面で「紳士」と労働者階級の被告とでナプキンズが依怙贔屓をするのは、以上のエピソードを重ね合わせて見るなら、必ずしも誇張ではなかったということがわかる。初演の会場にいた観客のなかで社会主義運動の同志にはじつにリアルに感じられる話だったわけである。ただしナプキンズがジャック・フリーマンの道路妨害罪を裁くなかで、「紳士がた〔陪審員〕に申し上げるが、道路妨害というこの重罪をだれもが常時犯さずにいられるかといえば、じつは疑わしいのです。ふたつの体が同時におなじ空間を占めることができぬというのが、よく知られた物理法則なわけですから」（20）と思わず述べてしまうところは、この裁判官の軽率さと愛嬌を示すもので、観客の笑いが取れたくだりだろう。モデルとなったエドリン判事あるいはグランサム判事であれば口が裂けても言わなかったであろう台詞なのである。

IV.　初演の配役、制作、劇評

『テーブルは覆る』の初出版には初演時の配役が出ている。主要な役を挙げると、裁判官ナプキンズは H. バートレット（H. Bartlett）、メアリー・ピンチはモリスの次女のメイ・モリス（May Morris, 1862–1938）、そしてジャック・フリーマンは H. H. スパーリング（Henry Halliday Sparling, 1860–1924）が演じた。スパーリングとメイ・モリスはこの時点で交際しており、1890 年に結婚する（98 年に離婚）。また、端役だが、被告人の証言者のひとりとしてカンタベリー大主教の役をモリス自身が演じた。前述のジェイムズ・オールマンが検察側証人である巡査部長スティックトゥイット（Sergeant Sticktoit）を演じ、メアリー・ピンチのパンの窃盗容疑およびジャック・フリーマンの道路妨害罪容疑と暴動煽動罪容疑の両方につ



『テーブルは覆る』初演の舞台風景。『ペル・メル・バジェット』1887 年 11 月 3 日号

いて不誠実でいい加減な目撃証言をおこなう。オールマン自身の裁判と刑罰を知る観客にはこれは大受けであったことだろう。

上演の正式なプロデューサーは同志の H. A. バーカー（Henry Alfred Barker, 1858–1940）であったが、作者のモリスみずからが配役の任に当たった。ジャック・フリーマン役には当初バーナード・ショーに依頼した。ショーは一度引き受けたようだが[5]、結局断ってきた。「モリスはわたしに被告人を演じさせたがったが、かれの社会主義同盟の若いメンバー〔ハリデイ・スパーリング〕にさせるほうが賢明であるとわたしはかれに説き伏せたのだった」（qtd. in Henderson, ed. 275）。カンタベリー大主教の役についても当初はウォルター・クレイン（Walter Crane, 1845–1915）に依頼したが断られた。デザイナーとしてのクレインはこの年に設立されたアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会で主導的な役割を担っていたわけだが、社会主義運動においてもモリスに追随していた。クレインが断った理由は、

大主教の役を自分が演じる資格などないと思ったからだという（Crane 261）。それでやむなくモリス自身が演じることになったのだが、これが結局公演の最大の呼び物となった。ジャック・フリーマンの弁護側の証人として召喚される役である。大主教は「肩の凝る教会勤めの息抜きになるようなちょっとした気晴らし」が欲しくなり、「社会主義集会の噂を耳にしていたものだから」、日曜の朝に辻馬車を飛ばしてビードン通りまで行ってみた。だが集会に行ってみると「聴衆は微々たる数」だったのでがっかりした（これは原告側の「一千人の大集会」という虚偽証言への反証となる）（15–16）。さらにかれは被告が「無礼千万な言葉」を述べたので気分を害したのだという。

> 「うどの大木がひとり、小僧がひとり、老いぼれ爺さんがひとりか。たったこれっぽっちの相手に話をせにゃならんとは、なんてこった」とかれ〔ジャック・フリーマン〕は言ったのです。最後の暴言はわたしのことを言ったのだと理解しております。（16）

弁護側の証人にはカンタベリー大主教のほかにさらに詩人のテニスン卿と科学者のティンダル教授というふたりの著名人が登場する。テニスン卿はどういうわけか変装して社会主義集会に出席したらしい。かれの証言は以下のとおりである。

> **ジャック・フリーマン**　伺いますが、あなたはファリンドン通り13番地の社会主義同盟の集会に変装して出席なさいましたね？
> **テニスン卿**　それが君にとって何だというのかね？　何でそんなことを知りたいのかね？　まあ、その話なら、たしかにそこにいたわい。
> **ジャック**　誰がお連れしたのでしょうか？
> **テニスン**　警官で、ポトルゴフという名だった。名前からしてロシア人かと思ったが、英国人のようだ――しかも嘘つきじゃ。たいそう面白いですよとやつは言いおった。それでわしは出かけたのじゃ。
> **ジャック**　たいそう面白かったのですか？
> **テニスン**　いいや。じつに退屈だった。

ジャック　出席者は何人おりましたか。
テニスン　17 人おった。数えてみたのじゃ。ほかにすることがなかったものでな。
ジャック　恐ろしいことを企んでいましたか？
テニスン　そんなものは聞けなかった。やつらは座って煙草をふかしておった。ひとりの馬鹿が議長席につき、別の馬鹿が文書を読み上げておった。それからやつらは、翌週にどの馬鹿どもがどこに繰り出して馬鹿話をぶちあげるのかを延々と議論しておったので、わしはうんざりした。時々、はげ頭の年寄りの馬鹿と青い服のずんぐりした馬鹿が冗談をとばすと、連中は大笑いしておった。だがわしにはその冗談がわからなかったので、出てきてしまったのだ。
ジャック　ありがとうございました。
ハンガリー氏〔勅選弁護士〕　テニスン先生、ひとつ質問があります。彼らの冗談がわからなかったとおっしゃいました。しかしかれらが真面目なときにはおわかりになったのでしょうか？
テニスン　いいや、わからんかった。わかろうともしなかった。社会主義をわかりたいなどとは思わん。社会主義はわしの時代のものではないのだから。［退場］(17–18)

このテニスン卿の台詞も、社会主義者が大勢集まって暴動を企んでいるという原告側の主張に対して（社会主義への反撥にもかかわらず）反証をなすという皮肉になっている。台詞のなかの「青い服のずんぐりした馬鹿」とは、モリス自身を示唆している（青い服はモリスの仕事着であり、普段着でもあった）。作者であり演者であるモリスが自分自身を笑いの種にしており、これまた会場を沸かしたことであろう。モリスはテニスンの詩を青年時代に愛読し、大いに刺激を受けているのだが、このように茶化しているのは、桂冠詩人としてヴィクトリア女王に頌歌（オード）を捧げる役割への批評と見てよい[6]（テニスンの後期作品についてのモリスの評価はかなり辛口であった）。なお、初演時にモリスはテニスン役を同志の A. ブルックス（A. Brooks）に依頼した。「たまたまちょうどよい口ひげと憂鬱な気質が結び合わさっている」という理由による配役で、モリスはブルックスを「相当に

無礼な言葉遣いで仕込んで」（Shaw, *Our Theatres* 212）役作りをさせたのだという。

三人目の弁護側証人として登場するティンダル教授とは当時のイギリスの代表的な物理学者であるジョン・ティンダル（John Tyndall, 1820–93）を指す。大気中の太陽光の散乱現象（「ティンダル現象」）を発見するなどの業績がある。社会ダーウィニズムを支持し、自由党のグラッドストン党首が前年に提出したアイルランド自治法案（Home Rule Bill）に反対しており、反動的な知識人の代表として登場している（George 28）。被告ジャック・フリーマンが酒場で警官に話していたことを聞いたかどうかというやりとりはこうなっている。

> **ティンダル教授**　ええ、聞きました。かれは社会主義団体の規模と力を自慢しておった。
> **検察官ハンガリー氏**　それを信じられましたか？ それに驚かれましたか？
> **ティンダル教授**　少しも驚きはしませんでした。グラッドストンの自治法案の当然の結果と思えましたね。信じるかどうかについては、かれが冗談を言っているのはわかりました。だが思うに、かれの冗談はきわめて真面目な本心を隠しておりました。かれは断固とした狡猾できわめて危険な人物であるようにわたしには思えました。（18）

以上のように、宗教、文学、学問の 3 つの世界から体制派のトリオを登場させて皮肉を加えているわけである。

初演は 10 月 15 日（土曜）の夜のことだったが、2 日後の 17 日に『ペル・メル・ガゼット』は一面に無署名[7] の劇評を載せた。見出しは「ファリンドン通りのアリストパネス――『地上の楽園』の著者による社会主義インタールード」（Aristophanes in Farringdon Road: A Socialist Interlude by the Author of “The Earthly Paradise”）となっていて、以下記事がつづく。

> 社会主義同盟のホールはじつは長く狭い屋根裏部屋で、天井と垂木は

> 白漆喰が塗られ、壁面は代赭(たいしゃ)で赤く塗装されている。唯一の飾りはカール・マルクスの写真であった。〔...〕舞台で使える広さはせいぜい幅15フィート〔約4.5メートル〕、奥行きが8〜10フィート〔約2.7〜3メートル〕ぐらいか、新しい芸術形式の揺籃の地としてはかなり手狭だった。観客は主として労働者階級の社会主義者たちからなっていた——かれらが当然〔社会主義〕同盟の大半を占めていた——のだが、芸術方面の〈ユートピアン〉たちもちらほらと見えた。

観客のひとりに後に詩人・編集者として名をなすアーネスト・リース (Ernest Rhys, 1859–46) がいた。かれが後年に出した回想記のなかで、開演前にジェイン・モリス (Jane Morris, 1839–1914) が客席に入ってきたときの様子をこう書き留めている。

> 幕が開く前にわたしはひとりの人の姿を見て心が躍った。さながらラファエル前派の絵のなかからそのまま抜け出してきたかのような姿が観客のなかを通り過ぎてゆく。モリス夫人だった。そのすらりと伸びた麗しい肢体、長いうなじ、そしてきりりとしまった美しい青ざめた顔立ちは、ギネヴィアやクレオパトラにもまして女王の威厳を備えているように見えた。(53)

ジェインは娘のメイが重要な役割を演じるということで見に駆けつけたのであろう。じっさい、メアリー・ピンチの役は、第一部の法廷と第二部の田園の両方の場で重要な台詞を語るのみならず、歌も歌っている。その台詞は社会主義者への当局の弾圧に対する抗議とは別の、あるヴィジョンを語るものだった。それを次節で見ておきたい。

V. 社会主義とパストラル・ヴィジョン

第一部で窃盗容疑をかけられたメアリー・ピンチは、無実を訴える際に、自分の身の上を語る。それによれば、彼女は田舎育ちで、田園での暮らしを愛していたものの、生活が困窮したためにやむなくロンドンに移り住む

ことになったという。

> 夫は以前は田舎暮らしのすてきな若者でした。わたしと結婚するまえには週給 10 シリングで暮らしていけたのです。そこらで採ってこられるものもありました。ウサギも獲れたわ。わたしも少しは稼げたし、あそこではそう悪い暮らしではなかったのです。そのときは、あそこは昔からきれいなところでした。木々のあいだのグレイの小さなコテージでした。食器棚が空っぽでさえなかったら。でも花と夜鳴鶯（ナイティンゲール）の歌だけでは生きいけません。子どもたちが育ち盛りになったのに、賃金が減ったのです。農場主が新しい刈入れ機を手に入れたものだから、わたしの束ねる仕事も終わりました。赤ん坊がお腹にいなかったとしても、霧の深い 11 月の朝に何日か蕪（かぶ）の葉っぱを切り落とす仕事だけじゃ大した稼ぎにはなりません。(6)

田舎で困窮したあげく、ロンドンに出れば週給 18 シリングの仕事があると聞き、メアリーは夫と子どもたちを連れて上京、ところがいざロンドンに移り住んでみても生活はままならず、むしろ「きれいでがらんとしたグレイのコテージに横たわって死んでしまっていたほうがまし」(6) だったと思う。それでもパンを盗むことはしていない、そう彼女は弁明する。

大都市ロンドンで貧窮にあえぐ労働者階級の女性として、第一部のメアリーの装いはみすぼらしい。それだけに、革命後の田園に舞台転換した第二部でメアリーが「きれいな服を着て（prettily dressed）」登場してつぎのように語り出す場面は、対象の妙で、観客にとって印象的であったろう。

> なんて気持ちのよい朝なのかしら。ここ数日の、暑い晩夏の朝の素晴らしさといったら。初物の梨が熟し、小麦は刈り入れを待つばかり。川の水かさも減り、岸には草が生い茂っているこの時期は、わたしがそばかすだらけの子どもだった時分のほとんどを思い起こさせる。あのころは幸せだったわ。いろいろあったし、時には辛いときもあったのだけれど。そう、いまはそのころのことを楽しく思い出すことができる。(23)

そしてメアリーはナプキンズが隠れているのを見つける。冤罪の恨みを晴らす気持ちなど彼女には毛頭なく、むしろかれにこう呼びかける。

ギターを演奏するメイ・モリス

> あなたにひどい目に遭わされたあの日に、あなたにお話しした豊穣についてのすてきな夢が、全部実現したのよ。いいえ、それ以上。〔...〕〔わたしたちの家に〕いらしてくれたら嬉しいわ。近頃はわたし、まるで新しいおもちゃをもった子どもみたいで、新しくいらした人たちには、いま進んでいるすべてのことがらを見せたいと思っているのです。一緒にいらっしゃいな。わたしたちの教区のために新しいホールを建てているところをお見せします。そこで男たちが陽気に働いている様子を見物するのは、とても楽しいのだから。(24–25)

モリスが『ユートピアだより』を『コモンウィール』に連載するのは1890年のことであるが、その3年前にその未来社会と重なる(厳密にいえば、革命からそう時間がたっていないので試行錯誤の過渡期ということになるのであろうが)世界をここで提示しているのは注目に値する。観客にむけて、とりわけ、その大半を占めていた社会主義運動の同志たちにむけて、現体制の不正と不平等を示すのみならず、モリスの社会主義思想を活気づけるユートピアン・ヴィジョンを提示して、共有してもらうように働きかけること――これが狙いとしてあって『テーブルは覆る』の執筆と上演に力を傾けたのだといえるだろう。「カルマニョール」のメロディーにのせて歌わ

れる劇の幕切れの歌詞はこう始まる。

過ぎゆく日々は、いったいなにをなしたのか。
人による人の支配がなくなった。
それでどうなった、高き者と低き者は。
この世は平等、かれらは富み栄える。
　太陽は万人のために輝く、
　踊ろう、踊ろう、カルマニョール踊りを。(31)

おわりに

モリス没後にオフィシャルな伝記を執筆したマッケイル (J. W. Mackail, 1859–1945) は「じっさいのところ、タウンリー聖史劇の手法を現代の笑劇に応用するという実験からはなにも生じなかった」(II: 187) とこの劇を切り捨てている。モリスの社会主義関連の著作について (『ユートピアだより』をふくめて) 概ね辛口のコメントをしているマッケイルらしい評言であるとはいえる。

だが以上見たように、初演時の反応はすばらしくよく、モリス自身も出来映えに満足していたようである。H. A. バーカーの後年の回想によれば、劇のエピローグでモリスは「満面に笑みをたたえて舞台へと跳びだし」てきて、「カルマニョール踊り」の歌に加わったのだった (qtd. in MacCarthy 565)。中世の聖史劇の劇作法に基づきつつ、20 世紀前半に興隆する「アジプロ演劇」を先取りしたモリスの劇作品は、かれの文学面での仕事の副次的産物とみなすべきではない[8]。1880 年代に社会主義運動との関わりのなかで書かれた『社会主義者のための詩』(*Chants for Socialist*, 1885) や未完の物語詩『希望の巡礼』(*The Pilgrims of Hope*, 1885–86) と同様に、パフォーマティヴな可能性にあふれ、通常の読者層を超えた層に受容されたという意味でも、モリス作品のなかでも意外に大きな影響力を人びとに及ぼしたと思われるのである。

注

1 “*to turn the tables* and variants: to reverse one’s position relative to someone else, esp. by turning a position of disadvantage into one of advantage; to cause a complete reversal of the state of affairs. ［With reference to the position of the board in a board game being reversed, hence reversing the situation of each player in the game.］（1612）”（*OED*, “table” sb.）

2 “Up! up! my friend, and clear your books, / Why all this toil and trouble / Up! up! My friend, and quit your books, / Or surely you’ll grow double”（Wordsworth 130）.

3 See Shaw, “Morris as I Knew Him” xxxiii. コブデン＝サンダーソンは「モリスはワーズワスについて悪口を言うときには度外れなほどだった」（Morris was unmeasured in his abuse of Wordsworth）と回想している（Cobden-Sanderson, I, 180）。

4『テーブルは覆る』からの引用は1887年に社会主義同盟の機関紙『コモンウィール』のオフィスから冊子として出された初出版に依る（以下同様）。

5 メイ・モリス宛の9月31日付の手紙でモリスは「ショーは『インタールード』〔『テーブルは覆る』〕で演じるに同意してくれた」と書いている（Kelvin, II: 688）。

6 モリスは長女のジェニー宛に書いた1887年3月20日付の手紙のなかでこう述べている。「気の毒に、老テニスンは、われらが太っちょヴィック〔ヴィクトリア女王〕の記念祭に寄せる頌歌を書かねばならぬと思ったらしい。もう読んだかい。どう見てもマーティン・タパー並の代物だ」（Kelvin II, 633）。これはテニスンの詩「讃歌――ヴィクトリア女王記念式典を祝しての頌歌」（Carmen Saeculare: An Ode in Honour of the Jubilee of Queen Victoria）にふれている。詩人マーティン・タパー（Martin Tupper, 1810–89）の作品は教訓的で当時大衆的な人気があったが、凡庸で今日ほとんど顧みられない。

7 おそらく劇作家・劇評家のウィリアム・アーチャー（William Archer, 1856–1924）の手になる。ただしWiensはバーナード・ショーが書いた可能性もあるとしている（Wiens, “Introduction” 16–17）。

8 Wiensは「もっとも慎ましい基準によってであれ、モリスの「アリストパネス風作劇」は演劇としてひとつの成功事例なのであり、複数の劇評で取り上げられた以上、『テーブルは覆る』はさらなる批評家の讃辞を受けてしかるべきである」（“The Reviews” 19）と述べている。

参考文献

“Aristophanes in Farringdon Road.” *Pall Mall Gazette* 17 Oct. 1887: 1.

Boos, Florence S., ed. *William Morris’s Socialist Diary*. 2nd ed. Nottingham: Five Leaves Publications, 2018.

Cobden-Sanderson, T. *The Journals of Thomas Cobden-Sanderson.* 2 vols. New York: Macmillan, 1926.

Crane, Walter. *An Artist’s Reminiscences*. London: Methuen, 1907.

Dickens, Charles. *The Pickwick Papers*. Ed. James Kinsley. Oxford: Oxford UP, 1998.

George, Jo. “The Aristophanes of Hammersmith: William Morris as Playwright.” *The Journal of William Morris Studies* 201.2（Summer 2013）: 16–29.

Henderson, Philip. *William Morris: His Life, Work and Friends*. London: Thames & Hudson, 1967.

Henderson, Philip, ed. *The Letters of William Morris to His Family and Friends*. London: Longmans, Green, 1950.

Kelvin, Norman, ed., *Collected Letters of William Morris*, 4 vols. Princeton: Princeton UP, 1996.

MacCarthy, Fiona, *William Morris: A Life for Our Time*. London: Faber, 1995.

Mackail, J. W. *The Life of William Morris*. 2 Vols. London: 1899.

Morris, May, ed., *The Collected Works of William Morris*, 24 vols. London: Longmans, 1910–15.

——, ed. *William Morris, Artist, Writer, Socialist*. 2 vols. Oxford: Basil Blackwell, 1936.

Morris, William. *Journalism: Contributions to* Commonweal *1885–1890*. Nicholas Salmon, ed. Bristol: Thoemmes, 1996.

——. *The Tables Turned, or, Nupkins Awakened*. London: Office of “The Commonweal,” 1887.［*William Morris, Art and Socialist Movements: A Collection of Contemporary Pamphlets*. 3 vols. Ed. Yasuo Kawabata. Tokyo: Eureka Press, 2019. Vol. 2］

Rhys, Ernst. *Everyman Remembers*. London: J. M. Dent & Sons, 1931.

Salmon, Nicholas. “Topical Realism in *The Tables Turned*.” *The Journal of the William Morris Society* 11.2（Spring 1995）: 11–19.

Shaw, Bernard. “Morris as I Knew Him.” May Morris, ed., *William Morris, Artist, Writer, Socialist*. Vol. 2: ix-xl.

——. *Our Theatres in the Nineties*. Vol. 2. London: Constable, 1932.

Wiens, Pamela Bracken. “Introduction.” William Morris, *The Tables Turned or Nupkins Awakened: A Socialist Interlude*, Edited with an Introduction by Pamela Brackens Wiens, Athens: Ohio UP, 1994: 1–29.

——. “The Reviews Are In: Reclaiming the Success of Morris’s ‘Socialist Interlude.’” *The Journal of the William Morris Society* 9.2（Spring 1991）: 19–21.

Wordsworth, William. *The Major Works: Including* The Prelude. Ed. Stephen Gill. Oxford: Oxford UP, 1984.